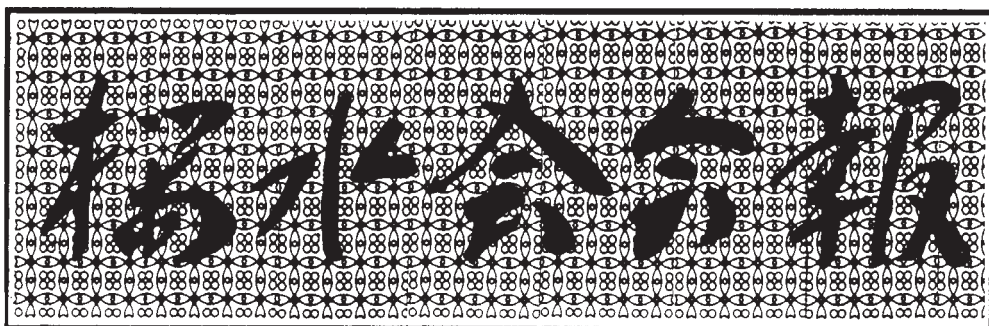




巻頭言

43号

会員の皆様へ

桜水会の会員皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。校友会桜水会は、1952年の卒業生64名で発足しました。学科名称は農学部水産学科、農獣医学部水産学科、生物資源科学部海洋生物資源科学科と変わりましたが、平成最後の又新たな年号となる年に新たに会員を迎え、会員数9,000名を超える組織となりなした。会員は社会の各方面で活躍しており相互に連絡を取り合い親睦、啓発を図っております。昨年残念なことに本学名を汚す不祥事がありましたことは承知の通りです。合わせて少子化により受験生が激減すると思われておりましたが、先生方の平素の努力、又校友会各位様の努力により例年同様に新入生を迎えることが出来ました。本学科の存続、発展には桜水会会員各位様のご理解とご協力が不可欠です。今後とも宜しく願い申し上げます。

ご承知の通り、当会の運営は準会員(学生) 校友会費に支えられております。父母の方々から会費の透明性や学生への支援を求められており、例年行っておりました

事業について、一つ一つ見直しを行っております。つきましては、以下の事業見直しにつきまして、何卒ご理解いただきたく思います。

＊桜水会会報のオンライン化によるペーパーレス・印刷費・郵送費の軽減

＊桜水会の総会・懇親会の隔年開催

＊会則の検討見直し

最後になりますが、2022年に桜水会は70周年を迎えます。実行委員会を結成してこれに当たりたいと思いますが、各年代の会員の力が不可欠です。ぜひとも実行委員会に参加・協力をお願い致します。会員各位様の参加・協力を得ましてより良い親睦の場としての校友会にして参りますので宜しく願い申し上げます。

(会長 橋ヶ迫 覚)

職場便り

佐賀県立厳木高等学校 教頭

前田修之

1990 年 4 月、卒業と同時に佐賀県立高校の理科（生物）の教諭となりました。教師生活 29 年になります。在学中は海洋資源学第 2 研究室で大型海藻の分布について勉強していました。東 禎三先生と 2 人で三浦半島の海岸を巡ったことや吉原喜好先生の部屋でパソコンを使わせてもらっていたこと、毎週スキューバダイビングの練習に行っていたことなども懐かしい思い出です。大学時代の友人や先輩、後輩が全国で様々な仕事をしています。卒業後もたくさんの繋がりを持っていて、それが刺激になったり、時としては連携をしたりという関係になっています。また、4 年生の時、大学院生の手伝いで赤潮プランクトンの液体培地作りを毎月やっていました。当時の私の研究とは関連がなかったのですが、教員になって佐賀大学と共同で藻類を用いた光合成実験のための教材開発をする際にその知識と技術が大いに役に立ちました。これらの大学時代の経験は様々な場面で仕事やそれ以外の活動に幅を持たせてくれています。

水産学科で学んだ知識は、もちろん生物の授業や実験に役立っていますが、30 歳を過ぎた頃、海を通して自然環境教育をすることを考えるようになりました。丁度その頃に日本自然保護協会の自然観察指導員講習会というものがあることが佐賀県で開催されると聞き、授業にも役に立つのではないかと

と思って受講しました。それから、勤務している学校で学校設定科目（学校独自設定の科目）として自然保護につながる自然の見方を学ぶ科目を作ったり、一般参加者を対象に自然観察会を開催したりするようになりました。学校の教員は部活動の顧問をするのですが、これと違って専門的に指導できるものがない私は、ヨット部、カヌー部、卓球部、バレーボール部などの運動部を担当した後、2007 年から環境部（という自然科学系の文化部）の顧問になりました。不登校だった生徒やコミュニケーション力に乏しい生徒たちが多い部でしたが、打ち上げられたアオサ類を堆肥化して栽培したミニトマトは糖度が上がる、ハツカダイコンに使うとアオムシがつきにくくなるなどの研究成果により全国大会で発表するほどになりました。また、全国の環境学習を積極的に行っている高校 16 校ほどで「全国高校生自然環境サミット」を開催しています。2018 年には北海道標茶高校で行い、そして 2019 年には第 20 回を迎え、沖縄県の辺土名高校が中心となって「やんばるの自然」をテーマに行う予定です。2004 年には私が勤務する学校で開催し、有明海と玄界灘を全国の高校生に体験し感じてもらいました。このサミットは、企画から実施まで高校生がやっています。教員は、同指導委員会としてサポートに徹し、我慢して我慢して口を出さないようにしています。生徒たちが自ら考え、話し合い、修正しながら作り上げていく、その成長過程を見るのが毎年楽しみです。

学校外では、一般の方を対象とした自然

観察会を開催しています。前述の講習会を受講した人を中心に自然保護団体「ネイチャー佐賀」をいう会が設立され、現在会長をしています。規模は大きくありませんが、身のまわりの自然を観察することで自然に親しみ、変化に気づき、行動し、自然を守っていく、そんな目を増やしていきたいと思っています。会としては県内各地で観察会を開催しており、他県の自然観察指導員連絡会とは年に1回、九州自然協議会という名で交流会をしています。また、20年前に受講した日本自然保護協会の自然観察指導員講習会の方は、現在、講師として年に1、2回全国の講習会に参加するようになりました。このような人たちの中では、海をフィールドにしている人は少数派で仲間が少ないのですが、災害や汚染、資源の枯渇など広い広い海洋環境の問題を考える上で、潮間帯の自然観察はとてもいい入り口だと思っています。また、学生時代に勉強した海藻に直接関わることとしては、佐賀県にある松島という人口50人ほどの島に関わっています。海士（男性）を中心とした島でした。しかし、磯焼けが進行し、ウニ、アワビ、サザエの漁獲量が減少しています。釣り客相手の瀬渡し業へ転向する人も多いです。そんな中、この島で産業としては未利用だったアカモクやワカメを女性たちが加工販売するようになりました。その資源量を調査したり、アカモク増産のための投石とその後の様子を記録したりといった手伝いをしています。この島には20代の若者が8人もいます。島が好きで、何とかこの島で暮らした

いという思いから、畑を再生し、おばあちゃんに習って海藻を畑に撒く栽培法でおいしい野菜を作ろうとしています。そんな若者の力になればと思い、海に潜っています。

このように、活動の幅は広がったものの、ベースになっているのは海であり、海洋生物だと思っています。2017年度から、佐賀県のレッドデータブックの貝類・甲殻類の委員にもなりました。時間外労働の多い学校という職場で働き方改革を推進する立場として、どう時間を作り、仕事以外にも楽しい時間を確保するか。近年SNSで再会した同期の投稿を見ながら、「負けられないぞ」と自分にねじを巻きつつ頑張っています。

(第39期)

株式会社 下田漁具 ゼスタ事業部

奥津 剛

私は、キンメダイ（以下キンメ）が名産であり母校の実験所もある下田の土地へ移住し、平成23年に株式会社下田漁具へ就職した奥津と申します。

弊社は、キンメ漁専用の漁具製造販売ならびにレジャー釣具の製造販売を行っており、創業が昭和44年、今年で50周年を迎える釣具メーカーです。『下田と言えばキンメ』と呼ばれるほどキンメが有名で名産となった背景には弊社製品が大きく関係しています。今から50年程前には深場のメダイ漁を生業としていた漁師さんたちにとってキンメは値打ちの無い魚、いわゆる外道として扱われていたそうです。そ

ここに遠洋漁業の漁師だった弊社の創始者がキンメの価値と漁法を広めるため下田漁具を設立し、今日のキンメブームに繋がっているそうです。

私は弊社レジャー部門でルアー（擬似餌）やロッド（釣竿）を開発するゼスタ事業部という部署の商品開発部の課長を任されています。学生時代より趣味であったルアーフィッシングの経験を活かし、時代のニーズに合わせつつ新たな釣り方や魚種を狙うための製品作りを目指しています。ゼスタもおかげ様で10周年を迎え、それに伴う記念モデルの企画・開発も同時進行で行っています。

商品の開発と一言に申しまして、実際にフィールドに通い、どのような釣具が適しているのかを判断することから始まります。そのため、東北から沖縄までほぼ全国のフィールドへ出向き実釣を繰り返しております。狙う釣り物もアジからマグロ、キンメまで多岐に渡ります。そして、フィールドから得られた情報を基に試作品を作製し、さらにテストを繰り返します。現場と製造工場を何度も往復してブラッシュアップを繰り返し、ようやく製品が完成します。また、世間に製品の良さを認知してもらうため動画や雑誌の取材なども同時に行います。そのため、フィールドに立っている時も常に結果（釣果）を出すことが求められるので、緊張感を持って日々仕事をしています。このような試行錯誤を重ねて生み出された製品が世に広まり、ネットやSNS等で釣果写真をアップしてくださっているお客様の投稿を見ると大変や

りがいを感じます。

学生時代に荒教授が仰っていた『現場に通え、答えは現場にある』という言葉の通り、試作品のテストにフィールドへ通えば通うほど新たな発見や課題が見つかり、製品へフィードバックできるという点で大学時代の先生の教えや経験を活かしていると個人的には感じております。特に、近年の釣具事情は非常に複雑化しており、魚の習性や生態を利用した釣り方の提案を求められることが多くなってきているため今まで培ってきた海洋全般に関する知見も役立っております。

釣具業界全体として震災や海難事故、コンプライアンスなど様々な理由により世間からの風当たりが強く肩身の狭い思いをすることもあります。少しでも釣りを通じて多くの人が幸せになれるよう日々努力を続けたいと思います。釣りを始めてみたい方やソルトルアーゲームをやっている方がいらっしゃいましたら是非、ゼスタ（XESTA）を検索してみてください。よろしくお願いします！

私事になりますが、先日2018年12月6日に第一子が誕生し、益々気を引き締め日々精進したいと考えている所存です。最後になりますが、皆様のご活躍と御多幸をお祈りいたします。

（第55期）



沖縄県粟国島での遠征テスト時に釣れたホウキハタ 25kg、自身の最高記録更新でした。

山梨県立富士湧水の里水族館

羽生 純

私は 2012 年に海洋生物機能化学研究室(病理学)(現・水圏生物病理学研究室)にて、間野先生のご指導の下卒業しました。4 回生の時は「水族館における魚病診断」研究を行い、葛西臨海水族園ご協力のもと水族館において発生する魚病に対する知識を深めていきました。卒業後はオリックス水族館(株)に就職し、オープン直後の京都水族館にて約 4 年間日本産希少淡水魚やオオサンショウウオをはじめ様々な魚類・両生爬虫類の飼育に携わりました。その後は会社を移して山梨県立富士湧水の里水族館にて勤務しています。現在はリーダーという役職につき、少し飼育業務から距離を置きつつ日々館の運営に勤めています。

水族館飼育員の仕事というと、大多数の方は生物の世話をするのが仕事の殆どだと思うかもしれません。しかし、現実には飼育業務以外の多岐にわたる仕事があります。当館は富士山の麓にある文字通り「森の中の水族館」で、職員総勢 8 名という他の大型園館

と比べてかなり小規模な水族館なので、飼育業務以外にも様々な業務があります。それは、受付・仕入れ・販売・企画・広報・人事・経理・施設管理・etc...と、運営に関する全てです。まるで小さな会社を運営しているような感覚ですが、それゆえに頭を悩ますことも多くあります。水族館という施設の性質上、展示生物を切らさないよう常に生物のストックを揃える・各種生物に合わせた餌料の調達・病気発生時に対処できるよう様々な薬剤の調達など、運営には多額の費用が掛かります。それ以外にも従業員教育や設備点検、県立施設なので県への書類作成など、リーダーシップや機械の知識や事務処理能力なども問われます。私にとって、飼育という仕事は学生時代から就職後も含めてある程度の積み重ねがあり、自信を持てる分野の中にはあります。しかし、今は経営という未知の領域に対して日々数字と格闘しながら働いています。

飼育員を目指している方は、生物や飼育の知識を持っているのはもちろん、それ以外の分野の知識も決して無駄になる事はないので、是非色々なことに興味を持って日々を過ごしてもらえればきっと将来役に立つ日が来るはずです。

(第 59 期)

焼津市地域おこし協力隊

三浦 愛

私は海洋資源育成環境学研究室(現増殖環境学研究室)に 4 年次から修士課程まで在籍し、杉田教授、糸井准教授を始め良き先輩、同期、後輩に恵まれて楽しく実りあ

る学生生活を過ごしました。修士課程ではトラフグ養殖におけるプロバイオティクス利用について研究し、海洋性乳酸菌の利用期待を考察しました。研究以外でもTAやサンプリングなどフィールドに出る機会を与えられ、人に教える楽しさを見出し、就職は研究職ではなく、釣り具販売店を選択。3年ほど務めた後、魚料理を学びにイタリア留学をし、2017年10月より焼津市地域おこし協力隊に委嘱されました。地域おこし協力隊とは、人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に受け入れ、地域協力活動を行ってもらい、その定住・定着を図ることで、意欲ある都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とした制度です。着任した地域によって依頼される仕事は様々ですが、焼津市はカツオ、マグロの水揚げ高日本一の港町であり、水揚げされる水産物が特徴的な3つの港（焼津、小川、大井川港）を有しております。

私は観光交流課に属し、市外から人を誘致する観光ルートの開発や、既存イベントのブラッシュアップを任務としています。先に書きましたが、大学院を卒業後、釣り具店に就職し、観光資源として魚釣りに期待を寄せておりました。焼津市長、観光課の皆様のご理解の元、魚釣りによって地域を活性化する事業が開始しました。と、言いましても手探り状態の中で一年間、釣りの初心者に向けた「船釣り体験教室」を実施して参りました。一般の方見れば敷居の高いレジャーである「船釣り」の魅力をどう

伝えていくかを議題として月に2回ほど開催しています。広報はツイッターやフェイスブック、インスタグラム等のSNSと、最近では前に乗船してくれた方がお友達を連れてくるという口コミでお客様が増えてきました。「非日常を楽しみ、自分で釣った魚を自分で捌いて味わうという思い出作りが出来た」というご感想をいただくことが多いです。

1人で船釣りとなると「道具は何を用意すれば良いのか」「持ち物はなにか」「どんなルールなのか」「船長は釣りを教えてくれるのか」など心配事が多過ぎて中々行く気になれないことがあると思います。その心配事をまるっと請け負って楽しい船釣りにするのが私の仕事です。私自身は釣り体験教室を行うにあたって、船長とのコミュニケーション、お客様とのやり取り、道具の用意、天気や海況など安全面の配慮等、やる事はてんこ盛りですが、毎回楽しそうなお客様の笑顔を見ると素敵な仕事が出来て幸せだと感じます。今年は自分自身も練習という形で釣り教室を開催してきましたが、来年度は回数も増やし、協力していただく遊漁船も増やしていく予定です。地元の方々もとても協力的で応援していただいております。メディア等にも取り上げていただき、益々お客様が増えていくことが期待できるので、魚釣りを焼津市のNo.1レジャーにすべく努力して参ります。

（第59期）

海洋生物資源科学概論の 講義内容紹介

*海洋生物資源科学概論（1 年次・必修）では、卒業生を講師にお呼びし、講義をお願いしています。今号より講義の概要を掲載します。

水産・海洋高等学校教員から

水産加工会社経営者へ

株式会社能水商店 代表取締役
松本将史

<略歴>

1978 年 新潟県新潟市生まれ

2001 年 生物資源科学部海洋生物資源科学科卒（資源情報管理研究室）

2002 年 新潟県立海洋高等学校教諭

2018 年 株式会社能水商店代表取締役

<学生時代>

釣り・貧乏旅行・登山に明け暮れました。長期休暇はほとんど野外で過ごしていました。成績と卒業研究はぱっとしませんでした。が、教職「理科」を目指す仲間と先生に恵まれ、人並みの「大卒」にはなれました。

<水産・海洋系高等学校教諭の仕事>

教科「水産」の教員免許を出せる大学が少ないため、採用試験は通過しやすいのが現実です。各都道府県内の異動は少なく、ライフワークを見つけないと定年まで授業と学校行事の繰り返しになってしまいます。それぞれの学校にはその土地に存立する理由があり、地域の課題解決に教育活動と絡めて取り組めば成果が出やすいもの

です。昭和的ではありますが、「サラリーマン教員」にだけはないで欲しいと思います。

私の場合、実習の一環で行った豊富な産卵期サケ資源を活用した水産加工品開発をきっかけに、学校の魅力向上や交流人口の増加、産業創出といった課題に関わり、学校外の人と連携することの面白さに触れました。そして、2018 年、水産高校を退職し、株式会社能水商店の創業に至りました。

<株式会社能水商店とは>

新潟海洋高校食品科学コースで食品産業について学ぶ生徒、およびクラブ活動として食品研究部に所属する生徒に、水産食品の原料確保から商品開発、品質管理、マーケティング、販売の各取り組みに参画させ、地域水産資源の利用と人材育成を図ることを目的とする会社です。インターンシップを継続した「デュアルシステム」と呼ばれる関係を学校と築き、競合他社と差別化を図りながら地域振興に寄与しています。詳しくは、HP で「能水商店」と検索してください。

<後輩に伝えたいこと>

人生は限られています。人間は、仕事（遊びも含む。そもそも仕事と遊びの境目はありません）を通じて世の中をより良くしていく義務を負っています。その成果を大きくするために、日々失敗を恐れずチャレンジを重ねてください。世間からは決して「優秀」とは見られていない日大生。でも社会では、「優秀」より「有能」であることが求められます。「優秀」でなくてもチ

チャレンジの質と回数で「有能」にはなれません。人から期待され応えられる。私自身、そんな人間になりたいと思います。

(45 期)

就職するに当たっての心構えが重要

株式会社本田技術研究所

金子直博

今回、講演をさせていただきました金子と申します。1998 年、当時の農獣医学部水産学科を卒業し、現在、(株)本田技術研究所という会社で 2 輪車の開発に携わっております。水産学科入学に際しては、水族館で働きたいという希望を持ち入学して参りました。当時の私は、水産学科に入り実際どのような就職先がありどんなことをやっていくべきか分からず、日々の授業・学校生活を過ごしておりました。今、仕事をする中で当時を思い返すともっとこうしておくべきだった、ということが思い返され、アドバイスとして皆さんの参考になればと思い講演させていただきました。仕事の話も色々ありますが、就職するに当たっての心構えが非常に重要だと感じたので、この観点で以下のお話しをしました。①就職先は多々ある。比較的時間のある今の時期にどんな職種があり、それぞれどんなことをしているか、どんなことができるかを広い視野で調べる。②やりたいことを見つける。今考えていること以外にも、魅力があったり、やりたいことが見つかるかもしれない。やりたいことが見つければ、それに対し何が必要か、学校から何を学び取れるのかが分かってくる。③現在

から就職までのイメージを立てる。どの時期に何をすべきかを現段階で把握し、イメージ（計画）を立てて行動していく。いざ考えるとなかなか取っ付き難いかも知れませんが皆さんの就職活動の一助となれば幸いです。

(47 期)

長良川の川漁師と

世界農業遺産の天然鮎事情

長良川漁師 / ゆいのふね代表

平工顕太郎

「清流の国」と評される岐阜県には 437 本の一級河川が存在します。海がない地域ゆえに、私たちは暮らしの身近に川を感じ、川からの恵みを享受しながら様々な産業や伝統、工芸品、さらには芸能に至るまで地域固有の川文化を発達させてきました。川が水運として賑わいをみせた名残は現在でも川湊や川舟によって感じられ、1,300 年の歴史を誇る長良川鵜飼の情景も岐阜らしさを醸し出しています。

岐阜が誇る川文化としては幾つか存在します。その一つが「天然鮎の競り」です。全国の公設卸売市場において天然鮎の「競り台」を保有する卸売市場は岐阜市中央卸売市場のみであり、毎年鮎シーズンの 5 月 11 日～11 月下旬には、県内全域の河川から水揚げされた天然鮎が毎朝競りにかけられます。そのため、流域各所に天然鮎集荷所があり、漁業者だけでなく一般の釣り人からも鮎を買い取る専門業者が存在し、その鮎が翌朝の競り台へと並べられます。岐阜は日本国内における天然鮎の市場

価格を司る地域です。そのプライドが私たち漁業者の仕事の活力になっています。天然鮎の競りでは、その容姿や鮮度だけでなく、水揚げ河川名、水揚げ漁法、水揚げ漁業者によっても値に差が生じます。鮎は、図鑑によれば（リュウキュウアユを除いて）1種類のみですが、実際には生息する河川によって味も個性も変わる魚です。別名を「香魚」、英語名を“sweetfish”といい、その香りの由来は内臓です。その内臓をつくるのが鮎の生息環境と餌なのです。

天然鮎は寿命が1年なので年魚と呼ばれる両側回遊魚です。雪解け水が温む頃、鮎の稚魚たちはより良質な餌を求めて海から川へと遡り、川の上流部を目指します。ここから半年間を川で過ごし、良い餌場を見つけた個体はその場所に居着き、縄張りを形成して単独行動に移行します。鮎は、川底の石表面に付着した苔を餌とし、常に新芽を好みながら唇で何度も苔をこそぎ取るのです。一見、陸上からは単調な流れに見える河川でも水深や流速、酸素供給量や水温などの条件により餌場の一等地や二等地が存在するわけです。より良い餌場を求めて鮎は1日中、水面の下で縄張り争いをしています。

河原に彼岸花が咲く頃、鮎の体表に婚姻色が現れ産卵の準備へと入り、各々の縄張りを解放し、群れを成して産卵場所へと移動します。鮎が川を下る行動を「落ちる」と表現し、この時期の鮎を「落ち鮎」と呼ぶことが多いです。砂礫底で産卵を終えると鮎たちは短いその生涯を終えます。孵化した仔魚は、遊泳能力が弱いため川の流れ

に乗って海へと入り、翌春の遡上まで沿岸域で過ごします。

昨今、漁業者の減少や河川環境の変化に伴って天然鮎の水揚げ量が減少しています。2004（平成16）年以降は、天然河川からの水揚げよりも養殖鮎の生産量が上回り、その差がどんどん広がる状況です。養殖池でも育てられる鮎ですから、生息環境が変化に富んでいなくても生産が可能です。鮎の生息範囲は、中国大陸の大河や朝鮮半島、ベトナムにも及びます。しかし、日本の急峻な地形によって形づくられる瀬と淵の連続、これこそが天然鮎の内臓を育む最高の条件です。「腹黒い」というと人間ではあまり良くない表現ですが、鮎にとっては褒め言葉です。上質な天然鮎の内臓は黒いのです。人間に例えるならばアスリートの内臓です。脂肪分が少なく、腸管には苔がビッシリと詰まっています。天然鮎は、日本風土の最高傑作であり、日本食の代表格だと私は感じています。それなのに、本流に堰やダムがない川は、現在の日本にどれだけ残っているのでしょうか。鮎にとって暮らしやすい川は、どこに行けば見つけられるのでしょうか。

私が所属する長良川漁業協同組合には、鮎を捕らえる漁法が19ほど残されています。川漁師は、いかなる自然条件下でも川から鮎を水揚げし、卸売市場へ出荷しなければならぬ仕事ですから、状況の変化に対応できるように常に訓練しています。鮎漁には木造和船を使用します。私は、長良川に現存する御料場（皇室献上鮎を獲る専用区域）の傍らに4艘の舟を所有し、手投

網漁、舟投網漁、火振網漁、夜川網漁、瀬張網漁、ぼうちょう網漁などの漁法で天然鮎を水揚げします。川舟は、海の漁船とは異なり、管理に多くのエネルギーを要します。川の水位変化は、干満のような規則的周期で訪れず、不規則な上昇と下降の連続です。また、木造和船は、船内に溜まった水が自動排水しないので、雨の日には必ず船内の水を掻き出すために川へ足を運ばなくてはなりません。台風の日には、河原で寝泊まりしながら朝までこの作業を繰り返し、水位変化に合わせて舟を岸に寄せたり離したりを繰り返します。荒天時、皆さんが決して川に近づかない時間帯に私たち川漁師は舟を守るため深夜でも必ず川へ足を運びます。気象庁が発表する土砂災害警戒区域に該当し、避難勧告や避難指示が発令されている最中にでも川に寄り添って暮らさなければなりません。これが私たち川漁師の営みであり宿命です。命を落とさないのは、日頃から川の危険と隣り合わせているからです。何が危険かを知っているからこそ大きな事故を引き起こさないのです。

では、なぜ川漁を続けられるのか。それはやはり魅力的な川魚との出会いです。2015（平成27）年12月に「清流長良川の鮎」が世界農業遺産に認定されました。私たち漁業者が地域ブランドの底上げに貢献できるようになりました。全国的に希少とされるサツキマスは皐月の花が咲く5月にしか漁獲できません。それは伝統漁法の「すば網漁」や「トロ流し網漁」で漁獲します。底生魚の習性を巧みに利用する

「登り落ち漁」ではアジメドジョウやヨシノボリの類が漁獲できます。これらの底生魚は岐阜で「うるり」という名で流通します。長良川には海と川とを行き来する生き物も多く、モクズガニも秋のメインターゲットです。川魚料理が喜ばれる地域ゆえにウナギやナマズ、鯉や鮒、手長エビ、スッポンなども狙います。

一方で、私たちの身近に位置する川は、いつでも私たちの社会生活を素直に反映します。日本の高度経済成長の代償はまさに川でした。現在、岐阜県内33漁協における漁協組合員の総数はおよそ38,000人です。しかし、その中で職業として営みを続けられる専業川漁師は、5人を下回っている現状であり、子育て現役世代である私が35歳、次に若いのが67歳です。河川漁業で生活を続けられる漁業者は、日本屈指の清流の町においても非常に厳しい状態です。

古来より日本人が寄り添って暮らした「川」には山岳信仰が宿ります。山の頂きに住むと信じられた神様の乗り物である「龍」を具現化したものが川であり、平野の民に恵みをもたらしたり猛威を振るったり…。日本人は昔から水に感謝し、水源である山に向かって手を合わせてきました。川漁という仕事を通じて川に寄り添い生きること、そんな古き良き日本人の精神に触れられることが持続可能な社会の実現=SDGsに向けた第1歩だと私は受けとめています。地球に優しい暮らしをこれからも岐阜長良川で実践していきます。

（55期）

環境アセスメント入門 －JABEE は苦だが役に立つ－

三洋テクノマリン株式会社
小野ゆかり

海洋生物資源科学科の1年生を対象に、職業紹介に重点を置いて以下の講義を実施した。前段階で、筆者が卒業研究ではテーマの追求が不十分だったため大学院でも研究を続け一定の成果を得たこと、大学院在学中の就職活動では研究の専門にとらわれず幅広い職種から選択し、現在の職業にたどり着いたことを説明した。また、大学院に進学して良かった点、そうでもなかった点にも触れた。学生たちが環境アセスメントの業務内容を十分理解していないようだったので、業務についてわかりやすく説明した。すなわち、ある仕事の入札に応募し、会社をアピールして契約を取り、実際にフィールドに出て調査し、試料を分析して結果をまとめ報告書を完成させるところまで、様々な部署が協力して業務を遂行する。また、この業界では技術士の資格が重要な意味を持ち、筆者は在学中、海洋生物資源応用コースを選択し修習技術者となったため、将来、技術士の資格を得るのに大変有利となった点を強調した。

(64期)

水産高校の教員 新潟県立海洋高等学校 教諭

増田 真之介

水産高校は全国に46校あり、水産業の振興を目的に、水産業に携わる人材を養成するためのカリキュラムを実施しています。具体的には、漁業・航海、増養殖、食品、海洋土木・工学、通信、流通について、座学や実習を通して専門的に学習し、良質なキャリア教育が行われています。

本校を含む水産高校のほとんどは地方都市（周辺地）に所在しており、地域産業に根ざした高校が多いため、自治体や地元企業等とのつながりが強く、期待も大きいものがあります。しかし、近年の少子高齢化の影響を受けて入学を志望する生徒も減少傾向にあり、統廃合する高校が増えています。そこで本校では、広報活動の充実を図るとともに、同窓会が運営する寮や下宿施設等、遠隔地の生徒を受け入れる環境を自治体等と連携して整えてきました。その結果、本校に在学する約100名が遠隔地より入学しています。

以上のように、水産業を担う人材を養成するだけでなく、地域の振興にも寄与することが求められており、その中で水産科教員として微力ながらも貢献できていると実感しています。

(64期)

研究室便り

海洋生物生理学研究室

卒業生の皆様、お元気でしょうか。平成 30 年度の研究室では、お陰さまで朝比奈先生も鈴木も大過なく過ごし、学部生 14 名が多様な生物を対象として十人十色の姿勢で研究に取り組み、卒業までこぎつけました。また、喜納泰斗君が「アカエイにおける胎生機構の成立に関する生理学的研究」、鈴木亮彦君が「国内飼育下海生哺乳類の腸内細菌叢に関する研究」という論題でそれぞれ博士前期課程を修了しました。鈴木君は、イルカの腸内細菌叢の特徴とその構成が飼育施設で異なることを示した論文を J. Appl. Microbiol. に発表しました。自分の論文よりも、学生の論文が公表されることの方が私にとって喜びが大きいということを実感した出来事でした。来年度は、博士後期および前期課程に進む学生が各々複数おり、学部生も多く在籍する予定です。アメフト問題以降、学生達はやり場のない複雑な気持ちを抱いていると想像しますが、いま為すべきことを為し、堂々と歩むためにも、大いに楽しみながら研究にエネルギーを注ぎ、成果をしっかりと世に出して、科学史の一片に名を刻む、という気概をもって研究に取り組んでほしいと強く願っています。また、この春、研究室に澤山英太郎専任講師が着任されるので、新しい流れができていくと思います。卒業生の方々には、新体制の研究室にも遊びにきて頂けたら嬉しいです。

(鈴木)

月日の経つのは早いもので、三軒茶屋にあった農獣医学部水産学科魚類学研究室（日比谷 京 教授、廣瀬一美 専任講師）の助手に採用されてから 38 年が過ぎました。この 3 月末で定年退職となり、来年度は一応、特任教授として残る予定です。教授といっても限りなく非常勤に近い立場で、その分、研究室から少し距離をおいて物事を眺めることができるのではないかと思います。

鈴木先生は遠慮して書いていませんが、4 月からは教授に昇格します。来年度から、海洋生物生理学研究室は鈴木教授、澤山専任講師の新しい体制になります。

澤山君は平成 15 年度の当研究室の卒業生ですが、東京海洋大の吉崎悟朗先生の研究室で修士課程をやりたいということで、4 年生のときから吉崎研に行ってしまったので同級生にはあまり馴染みがないかもしれません。その後、愛媛県の岩城島にある「まる阿水産」という養殖魚の種苗会社に就職し、日常業務の傍ら、少しずつ環境を整えて独力で研究室を立ち上げ、DNA による家系判別を用いたマダイやヒラメの優良種苗の大量生産に結びつけてきました。また、成果を論文にして発表することで、着実に業績を上げてきました。この辺の取り組み方が、私には吉崎先生と重なって見えます。

澤山君の研究分野は、私がやってきた魚類の繁殖生理学とはかなり異なりますが、これからは異分野が行き来し合って科学

が進歩する時代です。今後の研究室や学科の発展に期待したいと思います。

今年度は昨年度に増して学部執行部に受験生/定員確保に対する危機感があり、すべての一般入試を全国 17 ヶ所で実施するという前代未聞の事態でした。私も千葉会場の監督責任者となり泊まり込みで行ってきましたが、2 期試験に出発する直前に学科事務に呼ばれました。行ってみると、1 期試験で当学科に合格した高校生が来ていて、学科や研究室の説明が聞きたいということでした。そこで、学科パンフレットで使っている安斉俊君のイラストの原画（学科事務室に飾ってある）や、3 年生に配る研究室紹介の冊子を見せて、卒業生や研究の幅の広さを説明しました。彼女は北里大の海洋生命にも合格していたのですが、当学科に是非入学したいと言ってくれました。

学科主任をやりながら、学科の印象をよくするにはどうしたらよいか、常に腐心してきました。これまでの努力が報われた気がして嬉しく思いました。

（朝比奈）



海洋環境学研究室

卒業生の皆様には、時下、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平成 30 年度の本研究室の構成は、廣海十朗特任教授、荒 功一教授、小糸智子専任講師の教員 3 名、4 年次学生 17 名でした。

廣海十朗先生は、昨年度ご定年を迎えられ、今年度より特任教授としてこれまでと同様に授業、演習等をご担当いただいております。

荒教授（平成 30 年 4 月に昇格）は、2000 年 12 月より継続して 18 年目となる『相模湾における沿岸生態系動態の解明（プロジェクト“SHONAM”）』を学部 4 年次学生 12 名とともに実施しており、同海域の物理・化学環境特性やプランクトン（一次生産、ピコ～メソサイズの全ての生物群）の生産性と栄養動態などを活発に調査しています。同海域は、2018 年に北太平洋海洋科学機構（PICES: North Pacific Marine Science Organization）より動物プランクトンの生産率測定の標準的な（簡便で迅速な）方法を確立するための世界標準海域に指定されました。それに伴い、荒教授は、10 月に横浜で開催された PICES 2018 年次会合で「北太平洋の（相模湾）沿岸域での動物プランクトンの生産率と餌要求量を推定するための経験則（回帰式に基づく）手法」について基調（招待）講演を行いました。また、特記すべきニュースとしては、プロジェクト“SHONAM”開始のそもそもの発端となり、多くの学生達（当時）が携わってくれたことにより数々の本邦初・世

界初の成果が得られ、2006 年度で一度終結していた「夜光虫赤潮の水質環境と海洋生態系に及ぼす影響に関する研究」が再開され、数年間継続することになりました。

小糸専任講師は新青丸／ハイパードルフィンの航海で伊豆小笠原明神海丘へ調査に行きました。前号で懸念していた明神海丘の近くにある明神礁付近は、結局警戒水域となってしまう、今年度は調査できませんでした。ともあれ、調査自体は予定通り遂行できたので結果的にはよい航海となりました。鹿児島県のサツマハオリムシ調査も相変わらず実施しております。今年度は水中ドローンの開発を手掛ける方が乗船され、錦江湾海底の動画を撮影されました。2007 年のハイパードルフィンによる錦江湾調査以来、久々にリアルタイムで海底のサツマハオリムシを観察しましたが、海底で元気そうに暮らしておりました。海底動画は Youtube にアップロードされておりますので、興味のある方は是非 full depth のホームページ

(<https://fulldepth.co.jp/>) からアクセスしてご覧ください。研究もさることながら、担任学年が 4 年次となり、年始から怒涛の卒論発表会、卒論コンペティション(塚本賞)の準備・開催を経て漸く一息つける時期になりました。感慨深いと言えばそんな気もしますが、担任になってからの 4 年間はあっという間でした。この調子で、気が付けば 5 年、10 年があっという間に経過していくと思うと空恐ろしい今日この頃です。

今年度の本学科海洋生物資源応用コース (JABEE 対応コース) の技術者教育の

一環である特別講義 (3 年次、前期) では、7 月 4 日 (水) に市橋 理氏 [第 37 期、アジア航測 (株)] が『環境コンサルタントの仕事と東日本大震災』、7 月 11 日 (水) に宮下一明氏 [第 38 期、(株) 東京久栄] が『環境アセスメント業務における技術士の役割』という標題で講義を行いました。また、2 月 9 日には就職指導課主催の OB・OG&学生情報交換会に山本 岳氏 (第 65 期) が来てくれました。彼は、南知多ビーチランドに就職後、新江ノ島水族館に転職した経歴の持ち主なので、当学科の水族館就職希望の学生が熱心に相談しておりました。

OB・OG の皆様にはお仕事の合間に訪問していただき、近況をご報告いただいているほか、様々な学部・学科のイベントにご協力頂いており、心より感謝申し上げます。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。平成 31 年度の研究室は、上記の教員 3 名、4 年次学生 11 名となります。卒業生の皆様が湘南 (藤沢) キャンパスの近くへお立ち寄りの際には、海洋環境学研究室にお越し頂き、後輩達を叱咤激励して頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

(荒・小糸)



増殖環境学研究室

本年度の研究室構成は、特任教授・杉田治男、准教授・糸井史朗、研究員1名、大学院博士前期課程1年次1名、学部研究生1名、学部4年次19名の総勢24名でした。研究成果は、学術論文が5編（うち、国際誌4編）および口頭発表6件（すべて国内学会）でした。糸井先生は学生とともに毎年初夏に2週間程、長崎大学の調査船・長崎丸で沖縄を中心とする南西諸島に調査に出かけており、来年度も準備に余念がありません。先生が主導するフグ毒に関わる海洋生態学や魚類分類学に関する研究は順調に発展しており、マスコミからの取材も年に数回程度あります。

私は、3月末で定年退職となり、4月からは特任教授という比較的馴染みのないポストに就きました。このポストは非常勤扱いですので、これまでより責任は軽減されました。そうは言っても生活自体はあまり変わることはなく、ほぼ毎日、大学に出勤しております。また、この1年間は講義を3科目（「海洋微生物学」、「増殖環境学」、「応用魚類飼育学」（くらしの生物学科科目））、演習2科目、実習2科目および学生実験1科目をこなしてきました。来年度は、特任教授の担当時間に上限が定められ、半分になりますので、浮いた時間を使ってこれまで発表してこなかった研究成果を論文にまとめ、世に出したいと考えております。来年度に助手の先生が研究室に着任する関係で隣の部屋に移動することになり（詳細は来年度の桜水会報でご紹介します）、現在、雑誌や専門書の断捨

離を執行しております。以前は、迅速に投稿論文をまとめるためには手元に有力な学術雑誌を置いておくことが必須条件であったように思います。しかし現在では、いつでも必要な論文をインターネット経由で入手することができる時代になりましたので、隔世の感があります。それはそれとして、これまで研究室にため込んだ雑誌は膨大な量に達しており、毎日、厚さにして1〜2メートル位ずつ廃棄しても、大方がなくなるまで3ヶ月程かかりました。さらに、本棚の奥の方からいろいろな懐かしい資料が出てきますので、つい「過去との対話」なる時間も生まれてしまい、なかなか断捨離から逃れることができません。しかしながら、前述のように時間制限がありますので、4月からは新しいオフィス環境で仕事ができることを楽しみに断捨離に励んでおります。

9月1日には日本水産増殖学会第17回大会を生物資源科学部で引き受けました（委員長・杉田、副委員長・朝比奈潔教授、事務局長・糸井史朗准教授）。例年この大会は12月に実施されていましたが、本年度は9月に変更したこともあり、当初は発表申し込みが少なく、どうなるかと心配しました。しかし、OBや学内の先生方のご助力で発表件数も増え、何とか無事終えることができました。ご協力いただいた方々にこの場を借りて御礼申し上げます。増殖学会は、口頭発表1会場とポスター発表会場からなる比較的小規模の大会ですので、質問も比較的気軽にできるなど、水産学会とはまったく雰囲気異なる大会です。

OB・OG の皆さんも学会デビューの際には水産増殖学会大会をご活用いただければと思います。

このような状況ですが、来年度も研究室に在籍しておりますので、お近くにお越しの際にはぜひお立ち寄りください。お待ちしております。

(杉田)

海洋生物資源利用学研究室

平成 27 年度より研究室に福島英登准教授を迎え、松宮と福島先生の 2 名の教員による研究室運営が 4 年目を終える時期となりました。教員 2 名体制になり、研究内容也多岐に渡り、内容も充実してきました。平成 30 年度の研究室所属学生・研究員は大学院博士後期課程 1 年次 1 名、大学院博士前期課程 2 年次 1 名・1 年次 1 名、4 年次学生 24 名、研究員（博士）1 名でした。本年度は博士課程の修了年次を迎える学生が前期 1 名のみでしたので、比較的余裕をもって発表・修論作成を終えることができました。また、4 年次学生も全員卒業研究発表を終えました。新年度（2019 年度）は大学院博士後期 2 年次 1 名、前期 2 年次 1 名、1 年次 1 名、4 年次学生は 24 名（内 2 名は休学して海外留学）を予定しております。新 4 年次学生はすでに各自の研究予定テーマを決定致し、現在は現 4 年次と引き継ぎ実験を実施しております。新年度も相変わらずの大所帯で研究活動に励む予定であります。

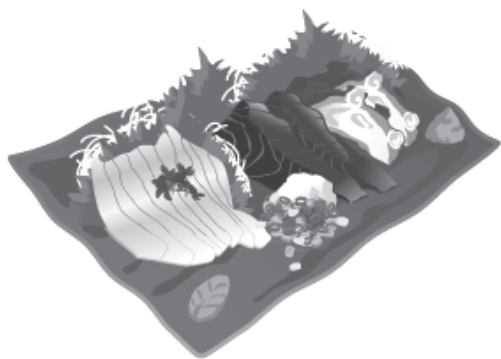
研究内容に関しては、福島先生の研究テーマに関連する機器も充実してきましたので、先生の専門である水産食品の加工・貯蔵に関する基礎・応用研究のテーマが増えました。例として、スケトウダラ冷凍すり身に関する研究、ユニバーサルデザインフードの製造、イカ肉を原料としたゲル化食品の製造、魚卵（イクラ）の品質、マサバ冷凍・冷蔵貯蔵に関する研究などのテーマで卒業研究を実施しました。生化学・分子生物学的手法に必要な機器も一通り揃い、本年度はリアルタイム PCR を新たに導入しました。タンパク質の分離、電気泳動、PCR などは複数名が同時進行で実験出来る状況にあります。松宮はキチン関連酵素、その他多糖分解酵素、アレルギー性の低い水産発酵食品の開発などをテーマとしております。バイオマスの有効利用に関する基礎・応用研究のテーマも含め、水産加工技術から生化学・分子生物学的手法までを幅広く用いて研究を進めております。

新カリで開始した研究室入室予定 3 年次学生を対象とした海洋生物資源科学実習 I（前後期）も 3 年目を迎えました。この実習では研究室の卒業研究テーマで実施している食品加工技術、食品の理化学的測定・物性測定、酵素活性測定、タンパク質の分離・分析技術、ならびに遺伝子増幅・解析技術を体験・学習し、各自が卒業研究テーマを決定する上での一助としております。また、4 年次学生を対象に食

品加工実習（4年次、海洋生物資源科学実習Ⅱ）も継続して実施しており、今年もサバ水煮缶詰、ポークソーセージ、ミカン缶詰の製造、工場見学（3年次・4年次合同ビール工場見学）を実施しました。最先端の生化学・分子生物学的手法のみならず、従来からの食品加工技術習得も食品企業で活躍する人材育成の上から重要と考え、継続して実施しております。

松宮は平成29年度より学部の企画広報担当および生命科学研究所長を拝命し、学部内では8種の委員会の委員長を担当しているため、本館2階の担当室と10号館3階の研究室とを行き来する日々が続いております。また、2019年度は松宮が大会運営委員長で第33回日本キッチン・キトサン学会大会を生物資源科学部で8月28日（水）、29日（木）に開催する予定であります。これらを何とか運営出来るのは、福島先生・研究室所属の皆さん並びに学科教員各位のご理解とご協力のおかげと深く感謝しております。

（松宮）



魚群行動計測学研究室

本年度は学部4年生23名と教員2名で研究室運営を行いました。学生は卒業研究を行うために北海道標津、洞爺湖、下田臨海実験所、静岡県伊東市赤沢および学部の実験室などで鋭意研究に取り組みました。2月6日の卒業研究発表会で全員が口頭発表を終え、昨年度から採用している、図表込みの見開き2頁の卒業研究要旨集の作成も概ね終わっています。本年度も1人の学生もドロップアウトすることなく提出し、また単位取得が危なかった学生も何人か居りましたが、これも全員無事にクリアすることが出来ました。

学生の就職は、巷間伝えられる就職戦線の好況と同様、早い時期にほぼ全学生が就職内定を得ることが出来ておりました。就職先は水産関係や食品関係を始めた民間企業、県漁連、中学校教諭など多岐に渡っています。その他2名の学生は、卒業研究で取り組んだ研究をより深めるため、本学大学院に進学して研究を継続することになりました。

例年同様、5月に鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸による6泊7日の東シナ海への航海によるトロール漁業と五島列島寄港、12月には北海道大学水産学部練習船おしよろ丸による八丈島近海でのマグロ立延縄操業を中心とした5泊6日の乗船実習を実施しました。さらに10月下旬には、社団法人グローバル人材育成推進機構所属の帆船「みらいへ」での岩手県宮古港から横浜港までの5日間の乗船実習も実施しました。いずれの航海も、様々な実習

プログラムが用意されており、普段体験出来ない船上での実習体験の他、美味しい食事を楽しみにする学生が居れば、船酔いに苦しむ学生も居り、各人心に深く刻まれる実習であったと思います。

学生達は本学の 4 年間で学んだ様々な知識や経験を糧に、これから社会でさらに立派に大きく成長していくことを、教員一同祈っています。会員各位におかれましても、引き続き彼らに対して温かいご指導ご鞭撻を賜れますよう、お願い申し上げます。終わりに、本年も数多くの卒業生より物心両面で様々なご厚情を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(小島)



水族生態学研究室

平成 30 年度の所属学生は、大学院生 1 名、学部 4 年生 22 名、学部 3 年生 18 名の合計 41 名でした。今年度は大学院生の伊藤洸君が博士後期課程の最終年次（3 年次）に進んでおりまして、博士申請論文発表会や博士論文の提出・審査で研究室が少々慌ただしい状態にありました。最終的には博士論文が無事に承認され、伊藤君には今春、博士号が授与されることとなりました。論文の題名は「北西太平洋海域におけるメジナおよびクロメジナ（スズキ目メジナ科）の生活史戦略」です。主査として論文審査にご尽力頂きました専攻主任の小島隆人先生、副査をお引き受け頂いた動物資源科学科の梶川博先生と生命農学科の大澤啓志先生に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、長い学生生活を終えて就職する伊藤君の将来に幸多からんことを願っております。

伊藤君が足かけ 6 年間にわたり取り組んできましたメジナ属の研究は、故・吉原喜好先生から受け継いだ研究室の伝統的テーマです。吉原先生は下田臨海実験所を愛してやまない方でしたので、当時のメジナ属の研究は伊豆半島の下田周辺海域のみを対象として行われておりました。しかし、研究を受け継いだ後は、クロメジナの産卵海域を探して黒潮流域をたどっていく形となり、最終的には南の果ての台湾近海まで対象海域が広がりました。今年度の 11 月には台湾国立台南大学の黄銘志先生と台湾西方の澎湖島まで足を運び、この海域にクロメジナの産卵場が形成されているという結論の確証を得ることができました。探求の果てに澎湖島まで辿り着けた

のは、歴代の大学院生や4年生が熱意を持ってメジナ属の研究に参加してくれたからだと思います。今さらながら「たくさんの優れた学生が研究室のメンバーになってくれると良い成果が得られる」という当たり前の事実を実感しております。

もちろん今年度の4年生も粒ぞろいの素晴らしいメンバーでした。例年と同様、釣りやフィールド活動が大好きな人が多く、毎日のように釣った魚を研究室でさばいて料理し、「漁獲」から「食品利用」までの過程を実践的に学んでおりました。充実した学生生活を楽しんでくれたようで、私も嬉しく思っております。まあ、難を付けたら、お酒の飲み方が豪快すぎたことくらいでしょうか。お酒で体を壊す人が出なくて本当に良かったです。

最後に来年度の研究室について触れておきます。今年度の9月に助教の中井静子先生が産前産後休業と育児休業から復帰されました。しかし、教員の業務は多様かつ膨大であり、ご出産前のような形で仕事を進めて頂くことは難しい状況にあります。そこで、今後は海洋生物実験センター2階の個室において独自のペースで仕事を進めて頂き、育児と教員業務の両立を図って頂くこととなりました。研究室を運営する上では多くの困難が予想されますが、学科内外の先生方にご支援頂きながら、所属学生に負担がかからないよう細心の注意を払っていきたいと考えております。変わらずご支援頂きますよう、謹んでお願い申し上げます。

(高井)

昨年9月に育児休業より職場復帰いたしました。昨年6月の桜水会総会には出席できず、申し訳ありませんでした。奥谷喬司先生もご出席されていたとのことで、毎年の懇親会でぜひ恩師との交流をお楽しみいただけたらと思います。

職場復帰に伴い、私のデスクは10号館から海洋実験センター2階に移っております。昨年何名か卒業生が訪ねてくれました。学部足に足を運ばれた際は、みなさまぜひお立ち寄り下さい。

本学科に勤めながらの出産は廣瀬一美先生以来とのことで、産休・育休の取得や授業、卒論生の指導などいろいろな調整が必要でした。学部の女性教員の数はどんどん増えていますが、出産や子育て経験のある女性教員となると少し少なくなります。女性教員の数が今よりずっと少なかった頃は、みなさん大変な苦勞をされたようですが、現在は産休取得の推奨や子育て情報交換会の開催など様々な支援が徐々に増えています。

今年度は育休取得もあり私の指導学生は2名でした。海産巻貝のウミニナと貝形虫のテーマで1人ずつです。それぞれ2012年若嶋君、2013年五十嵐さん、2014年小林君、2015年増田君・林さん、2016年中田さん・日色君・吉田君、2017年三浦君・天海君（ウミニナ）、2014年石井君、2015年金子さん、2016年佐藤君、2017年松元君、伊藤君（貝形虫）のデータや引き継いだ実験手法を活用させていただきました。

また、2017年には櫃ヶ浦のテーマで、2019年の3月には万石浦のテーマで卒業

研究の結果を取り纏め、日本生態学会で研究発表しています。3月の生態学会の発表では、万石浦が卒論テーマだった林さん、日色君、三浦君の3名が共同研究者となっています。氏名＋生態学会でweb検索すると要旨等が見られますのでお時間のあるときにのぞいて見て下さい。貝形虫の研究も小沢先生が取り纏め学会発表をしています。再解析のためにみなさんが取った過去のデータを開くたびに、一人一人が真摯に卒業研究に取り組み、後輩のために丁寧にデータを残してくれたことを感じています。ありがとうございます。

データと同様に、残してくれた写真も活用されています。2011年に潜水が得意な福田君・前藪君が撮った水中写真がとてよく撮れていて、アマモ場に関わる研究でずっと使用させていただいています。同じく2011年の八島君は、卒業後もたくさんの魚の写真を提供してくれています。後輩の卒業研究に活用できるものがありましたら、ぜひ皆さんご提供下さい。よろしくお願いいたします。

それから、3、4年生の就職活動に関わり、志望の企業や業界で働く卒業生と何度かコンタクトを取らせていただきました。皆さん後輩のためにいろいろとアドバイスを下さり感謝いたします。研究室OB・OGから直接話しを聞けるのは大変貴重な機会となります。大学に立ち寄られた際はぜひ仕事現場のいろいろを後輩にお話し下さい。

(中井)



久しぶりに下田臨海実験所でゼミ合宿をやりました！まずまずの釣果が得られたようです。

ウナギ学研究室

2018年度はウナギ学研究室最後の年です。これまで毎年のようにあった研究航海もなく、平穏に過ぎていきます。2013年の4月に日大に来て6年も経つのですが、赴任直後の開校式で特別講演をしたのがつい先日のように感じられます。この間、海洋の諸先生や事務の方々には大変親切にいただきました。教育業務では全く素人同然の私を丁寧に導きくださり、心からお礼申し上げます。忘れがたいのはやはり下田の実習です。毎年違った教員の方々とチームを組んで新入生にあたるわけですが、それぞれに持ち味があって、学生との接し方もさまざまでした。教え方や学生との距離感の勉強になると同時に、個々の先生ともさらに親しくお付き合い出来るようになりました。ありがとうございました。

これまで計 22 名の学生諸氏がウナギ研から巣立っていきました。このうち 5 名が大学院に進みました。私が日大に来てしみじみ良かったと思うことのひとつは、素晴らしい学生たちと出会えたことです。よくぞウナギ研を選んでくれたとその出会いに感謝しています。それぞれ道に違いはあっても、いつまでもウナギ研で過ごした日々をどうか忘れないでほしい。

6 月 12 日、さかなクンが研究室にやってきました（写真）。研究室のスタッフも巻き込んでドタバタ 4 時間もロケし、たくさんインタビューを受けました。NHK のニュースシブ 5 時という番組だそうです。しかし実際の放映となるとわずか 4 分、しかも私が写っていたところは静止画のみでした。ただ、さかなクンはとても感じのいい方でした。自伝「さかなクンの一魚一会」や CD「おさかな食べたらさかなクン」、指人形に地元のビワなどたくさんのお土産をいただきました。お礼のメールをいただいたのも驚きでした。

今年度は大がかりな荷物の整理と引っ越しがあるので、毎年 85 校前後行ってきたうなぎキャラバンはできるだけ受けないようにしました。どうしても断りきれないところだけに絞りましたが、それでも 3 月末までには計 30 校になりそうです。その中で特筆されるのは、インドネシアのジャカルタ日本人学校における初の海外キャラバンです。2019 年 1 月 15 日、16 日の 2 日間に亘り 4 年生 5 クラスにそれぞれ 90 分ずつウナギとウナギ研究の授業をしました。私が書いた科学読み物「ウナギのな

ぞを追って」が掲載されている光村図書の国語教科書 4 年の下は、日本全国で 3 分の 2 のシェアを占めるので、海外の日本人学校は全てこの教科書を使うことになっているそうです。ジャカルタ日本人学校でももちろん「ウナギのなぞを追って」を習っています。なので、いわば“ホーム”でサッカーの試合をするようなもので、大歓迎を受けつつ海外うなぎキャラバンは無事、大成功のうちに終わりました。この子らが帰国子女となったとき、私の授業を憶えていて、日大の海洋に入学してくる学生が一人でも増えたら良いなと思いました。

3 月 23 日には日大のグラウンドを借り切って、最後のサッカー大会が開かれます。研究室の OB・OG 諸氏にもお誘いを出しました。久々に日大ウナギ研“FC Eels”が集まります。今から大いに楽しみです。最後に、これまで研究室の活動にひとかたならぬ貢献をしてくれた渡邊 俊さん、山 梨津乃さん、マイク・ミラーさん、萩原聖士さんに厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

（塚本）



なんの為に僕は勉強するのだろうか？

得心という言葉がある。ある出来事を心底から理解、消化して心に落とし込むことである。これにより、初めて人は多くの厄介な事柄を受け入れ、前向きに生きて行くことが出来るように思う。あれは僕が高校生の頃、数学で空間ベクトルを学んだ時のことだった。空間に1点(α, β, γ)が存在し、その点が方向ベクトル(X, Y, Z)を持てば直線になる。また空間には、様々な方向ベクトルを持った直線が存在しており、その空間をある平面で切ると平面上には幾つもの点が現れる。ある平面上でたまたま近傍に2点が有ったとする。しかし、それらの点を形成した直線の方向ベクトルが異なると、平面を平行移動した別の平面上ではこの2点の距離は離れる。その時、この2点をねじれの位置にあると言う。

当時の僕にはこれは数学とはかけ離れた人生哲学に感じた。僕らがこの世に生を受けた時、まさに僕らは点として存在した。そして僕らの家庭環境や教育により僕らの方向ベクトルが作られ、僕らはそれぞれの方向ベクトルに従って成長して行く。一方、時間軸で切られる平面により僕らの直線はその時々々の時間平面上に友人や恋人を見出す。しかし、それぞれの方向ベクトルが異なれば時間と共に二人の間に距離が広がり二度とめぐり会うことは無くなる。人が物事を受け入れるためには幾つか

の認識プロセスが必要だと思う。私の場合、先ずは出来事を論理的に理解したいと思う。この理解の中には現象の理（ことわり：物事の基本的な原理、法則や仕組み）を含む必要がある。それが出来なければ、次のステップである感情や感覚でその出来事を受け入れることが難しい。人の苦しみは無限にある。しかし、それをどの様に受け止め、受け入れ消化していくかはその人の物の考え方によって大きく異なる。いつまでも感情に翻弄され、大切な自分の人生の時間を失う事は無駄に感じる。だからこそ、人生の荒波を受け入れるために論理的に物事を解析する力が必要だと思う。そもそも、単に生活するための数学なら小学校4年程度でも生きていけると言われている。しかし、数学は単に計算をする学問では無く、物事を成功させるための方法論を教えているように感じる。一般法則を導き出し、その法則から物事を解析する演繹的なアプローチがある。一方、 $n=1$ の時、 $n=2$ の時と具体的な値を入れて、その法則性から一般解を求める帰納法的なアプローチもある。これらはどれも僕らの人生を豊かにしてくれるものである。気になるあの子にアプローチするには演繹法的な直接的なアプローチがいいのか？ それとも周りから少しずつ攻める帰納法的アプローチにするべきかは、更に生物学を深く学ぶ必要があるかもしれない。そう、学問は人生を豊かにし、僕らを楽しませてくれ、そして涙を流す様な残念な結果を受け入れ易くもしてくれる。同じ事柄を体験しても、それを解釈し、受け入れるには人によ

り大きな違いが生じる。人生は短い！これは真の命題である。だからこそ、より楽しく、前向きに生きなければ損をするのだと思う。だからこそ学問をしなければならないのだ。それも出来るだけ早くから。

(森)



水圏生物病理学研究室

平成30年度の水圏生物病理学研究室は、学部生12名（内1名はオーストラリアに留学）、修士課程2年の西脇君、森さん、研究員の難波博士（日本大学非常勤講師）、藪博士（日本大学非常勤講師）、石川博士（栃木県水産試験場）、教員間野の計18名体制でした。就職状況ですが、今年も大変良好で、分野的には水族館が最も多く3名、飼料会社1名、水産商社1名、ビール会社1名、SE1名でした。大学院への進学者も5名おり、4名は本学、1名は琉球大学に進学することになりました。

研究活動としましては、今年も水族館や養殖場の魚病診断研究や、サンゴの病気研究に取り組みました。また、約8年近く取り組んできた、河川のアユなどで被害がみられるエドワジエラ・イクタルリ症に関する研究の目処がつき、国の事業として、これまでの成果をマニュアルにして内水面漁業や遊漁者に対して配布することになりました。

また、喜ばしいことがあり、現在、台湾中央研究院 Academia Sinicaで研究活動を展開している和田直久君が博士後期課程中に執筆した、論文題目「Occurrence of coral diseases at Akajima, Okinawa, Japan in 2010 and 2011」、が日本サンゴ礁学会の論文賞を受賞しました。本論文では、サンゴに形成された微生物群（黒色バンド）が健康なサンゴ組織を侵襲していく黒帯病

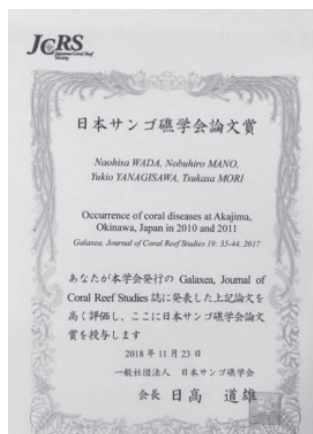
（Black Band Diseases: BBD）と呼ばれる病気が、阿嘉島周辺海域において最も優占して発生していることを明らかにした他、

BBDの発生状況や黒色バンドの変化を詳細に分析したものになります(本論文はオープンアクセスになっています。興味ある方は、Wada、BBD、Okinawaで検索してみてくださいれば読むことができますと思います)。現在、和田君は海洋生物の共生微生物に関する研究に精力的に取り組んでおり、今後の更なる活躍を期待しています。また、間野も「魚病細菌の動態と宿主との相互作用に関する研究」の題目で、平成30年度日本魚病学会奨励賞を受賞しました。本賞は、これまで本研究室を支えてくれたメンバー達に対するものであると考えており、今後も我が国の魚病学の発展に少しでも寄与していくことができればと考えています。

(間野)



平成31年2月6日卒論発表終了後の一枚
賞状を受け取る和田君



論文賞の賞状



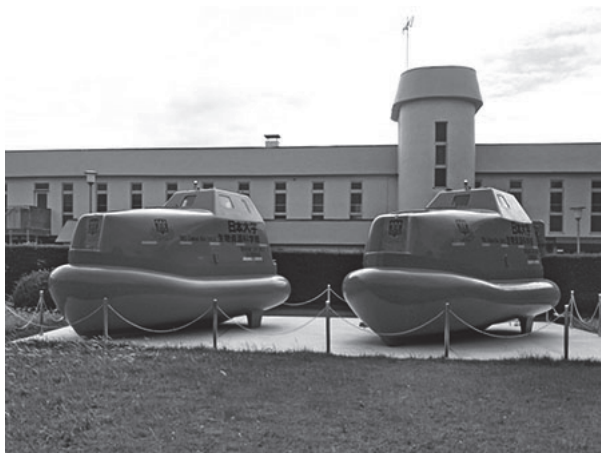
平成31年2月6日卒論発表終了後の一枚

下田臨海実験所

本年度の始めに、学部危機管理対策の一環として、津波襲来時の避難用救命シュelterを2艇（各25人定員）設置することとなりました。この救命艇は大型船に備え付けられている遭難時用の救命艇を改造したものであり、ハッチを閉じれば横転しても浸水することなく復元出来、水と食糧も3日分備蓄されています。もちろん、これらの救命艇を使用するような天災が生じないことを祈るばかりですが、備えあれば憂いなしで、海洋生物資源科学科の学生が安心して当実験所で、各種の実験と実習に取り組んでいただければと思います。またこれまで常駐して、実験・実習ばかりでなく、学生の卒業研究でも多大なご協力をいただいていた、技手の高城さんが、湘南キャンパスに転勤となられ、実習船すぎき2世の運行も伊豆で漁業を営む卒業生および地元漁業者に委託することとなりました。また食事提供も、学部が委託した業者から派遣された炊夫さんが行うようになり、昨年度までとは運営方法がかなり変化した年でもありました。さらに老朽化したマイクロバスの廃車もあり、当実験所を利用する学生・教員へのサービス低下が懸念されましたが、幸いにも学科の海洋基礎実習Ⅰを皮切りに、小型船舶操縦法実習やダイビングライセンス講習、研究室単位の実験実習などが順調に実施され、本年度も多数の学生が利用しました。この他、下田市教育委員会主催の水産・海洋科学講座への講師派遣など、地域貢献も行って参りました。

昨年度は食中毒を疑われる事例発生により、様々な制約の下での利用となっておりましたが、本年度はお陰様にてトラブル発生もなく1年を終えることが出来ました。来年度からは、本年度使用が停止されていた、簡易宿泊棟での自炊が可能となり、研究で長期滞在する学生が1週間500円の低料金で宿泊することが出来るようになります。来年度も引き続き、下田臨海実験所を利用する学生および教職員の皆様が、事故無く充実した実験・実習を実施できるよう祈念致すとともに、実験所としても出来る限りの努力を払って参る所存です。

（臨海実験所長 小島 隆人）



下田臨海実験所に導入された2艇の避難用救命シュelter

同期会便り

○2 期会

今年の「二期会」は 24 回目を迎え、昨年の相談通り三浦半島を目指しました。今回も例年通り、ホテルの手配から現地のコース選定など幹事の後夷さんが企画してくれまして、行程は春風香る 5 月 15 日に「城ヶ島」を一泊で尋ねることにしました。昔、馬堀時代に乗り慣れた京浜急行も随分立派な特急が半島を走っています。左に横須賀港少し沖合に猿島等を眺めながら懐かしい横須賀中央を過ぎ堀の内からは各駅停車となり、集合地の終点三崎口駅につきました。参加者は森・田中・瀬戸の三氏と幹事大谷木・後夷の二名計五名と少なくなりましたが、皆さん元気な顔が揃いました。だが残念なことに、毎回必ず参加されていた野村和夫さんが 3 月 1 日に外出先で倒れて亡くなられるなど淋しい報告もありました。

駅から早速城ヶ島行のバスに乗り、三浦半島先端の景色を眺めつつ終点に到着、先ずは腹ごしらえと観光協会推薦の、さかな専門の食堂で「刺身定食」を食べ、島巡りへと出発しましたがご存じの通りの高齢者揃いのため、途中で引返し早目にホテルに向かうことにしました。再びバスで三崎口駅に戻り隣の三崎海岸駅でホテル出迎えのバスで今夜の宿泊先「ホテルマホロバ・マインズ三浦」に入りました。6 階で懇談も昼寝もできる広い一部屋にして貰い、窓からは遠くに東京湾入口と房総半島が眺められてゆったりと寛ぐ事ができました。夕食はバイキング方式でしたが場所

柄新鮮なものの揃いで、たつぷりと品数も多くご馳走になりました。夕食後は、昔話でゆっくりと寛ぎましたが話の中心は野村和夫さんのことで、あれほど元気だった人が何故倒れてしまった？のかと悔やむばかりでご冥福を祈りました。

翌日は再び三崎海岸口に戻り、お土産品買い入れの為、港近くで下車。土産品専門店「みうらマルシェ」で色々探しましたが、物が良いだけに値段も高めな感じがしました。買い物もすませ三崎海岸口の始発駅に戻り、短い時間でしたが貴重な楽しい時を過ごし「来年の再会」を合言葉に家路につきました。来年は暖かくなってからゆっくり相談することになりました。



左から 田中・大谷木・瀬戸・森・後夷
(第 2 期 大谷木 緑四郎)

○21 期 適水会

日本大学号の思い出

平成 30 年 6 月 9 日（土）、北海道は日本海に面した爾志郡のおとべ温泉にて水産学科の遠洋漁業コース（以下「遠漁」）と漁船機関コース（以下「機関」）の同期会（適水会「てきすいかい」）が開催された。

この会は、開催地を日本各地に住んでいるその土地の同期が持回り幹事として主催し、2 年毎（かつては 3 年毎）に行うことになっている。毎回、遠漁、機関以外の増殖学科や漁業学科等から 1 ないし 2 名の部外の珍客が紛れ込むことがこれも許容範囲としている。日本各地、遠方は鹿児島からの小原君、計 17 名が参集、まさに健常で会うことに意義あり、の年代となった。

昭和 48 年春の専攻科修了（学部卒後 1 年間）以来 45 年を経た我々同期は、現役を引退した者が多数となったが人生が終わるわけではない。

宴会では、隣町の江差町の民謡歌手が江差追分等を披露する好企画が地元幹事（須田、高井、保田の 3 君）の尽力により生まれ、大いに楽しんだ。宴もたけなわの中、関東地方から自家用車で当地に向かう途中の Y 君が岩手県内の高速道路パーキングで突然死（病気）する、というショッキングニュースが飛び込み、一同驚愕したが、ただただ謹んで彼の冥福を祈るしかなかった。

当時、遠漁、機関は各々定員 24 名会わせて 48 名であった。学部 4 年卒業後専攻科 1 年を修了し、海技免状（遠漁は航海士、

機関は機関士）に合格した後、水産会社又は海運会社等に就職し、初めて船舶職員として海上勤務ができることになっていた。この海技免状取得の遠漁と機関のコースは 7 期（我々は 2 期）を以って消滅した。

5 年間の学生生活のなかで、強烈な思い出として今もって我々の胸中に刻まれているのは、2 度の航海、計 1 年間の航海実習である。今や知る人は少ないが、当時、日大は練習船日本大学号（740 トン）を持っていたのである。主に穏やかな南太平洋で実習し、立ち寄った港はハワイ、タヒチ、フィジー、パナマ等である。乗船する学生は定員 48 名、船長や指導教官を含む船員は二十数名だったと記憶している。練習船ではあるが、遠洋マグロ漁船を改造したものであり、日々漁労作業が続き、漁船に乗って漁業実習しているのが実感でもあった。実際、漁獲物は日本の港で水揚げされ通常の販路でさばかれた。洋上では、朝 4 時から数時間の投縄作業、昼過ぎから揚縄（あげなわ）作業が夜中まで続き、揺れる甲板での漁労作業を船員の指導を受けながら行い、マグロ漁船の厳しい生活を実感した。学生はローテーションで各種実習が組まれ、座学、航海当直、機関当直、投縄、揚縄が主な課業であった。当時、今は当たり前の GPS はなく、天体観測（昼は太陽、夜は星を六分儀により計測）により船の位置を計算して確定することが航海士を目指す者の必須技能であった。

炎天下での操業（漁業実習）、零下 40 度の凍結室での作業、真夜中の航海当直、食事当番として配膳や海水での食器洗い、

海水風呂、船内のどこにいても耳に響くディーゼルエンジン音等々、それまでの自由きままな学生生活が突然に規律ある海上生活になったことは多くの学生にとり耐えなければならない事象が多く、かなりしんどいな、というのが本当のところであった。私に関して言えば、船酔いの苦しさは死んだ方がましだ、と思ったほどつらかったことである。又、一部屋4人の2段ベッドの狭い船内生活では人間性が丸出しになり、葛藤や摩擦もしばしば発生した。

そんな海上生活の特殊性もあり、卒業後は船員になるとは限らず、一般的社会人となった者が多いが、日大号に乗船した経験は忘れられない記憶として、その残像は今もって強烈に残っているのは我々に共通である。

私は、卒業と同時に首尾よく外航船航海士資格を取得し、その後最高位の甲種船長（現1級海技士）まで取得し、主にサウジ、イラン、イラク等中近東やインドネシアから原油を運ぶ大型タンカーの乗組員として当時世界最大50万トン原油タンカーの1等航海士も経験した。船員生活は39歳まで勤め、今後の人生いろいろ考えるところあり、一念発起、社会保険労務士そして行政書士試験（どちらも合格率数パーセント）の受験勉強に1年余集中、首尾よく合格し、第2の人生として自分の事務所を開業して、経営者を顧客とする労務管理や社会保険、年金、会社の許認可等の専門家として早30年が経ち、多忙な日々を送っている。

健康に恵まれ、70歳を超えて尚顧客を

持つことを感謝しつつ、当分は現役である。



後列左端：著者（廣瀬幸一）



プロ歌手による江差追分



在りし日の日本大学号①



在りし日の日本大学号②

(第 21 期 廣瀬 幸一)

○桜水会 香川県支部

平成 30 年 10 月 18 日、香川大学農学部で桜水会 4 期の久米穂積さんが“若き日の南氷洋捕鯨”を講演しました。同行者は桜水会 20 期の長野泰三さん（元香川県水産試験場）と私、21 期の白井美昭です。久米先輩、若き日の記憶はすこぶる鮮明で大洋漁業日新丸捕鯨船隊の歌まで飛び出して、学生達から拍手喝采でした。驚いたことに、香川大学農学部准教授の松本由樹先生（神奈川県出身）が桜水会平成 7 年卒でした。松本先生の奥様も千葉県出身で広瀬一美先生の授業を受けていたということでした。奥様も現在、同大学に勤務されているそうです。

後日、桜水会香川県支部（久米支部長）より、調査捕鯨の鯨大和煮缶詰、ナガス鯨赤身肉、畝須ベーコンを学生達に届けました。学生達の要望で久米先生再講義を依頼されておりましたが、体調を整えて又、来るぞ！と元気よく大学をあとにしました。



左から 久米・白井・松本先生



久米講義中風景



左から 長野・白井・久米

(第 21 期 白井 美昭)

近況報告

【第1期】

○小梶 泰佐

年相応に元気です。出かける範囲は狭くなりましたが、できる限り歩いています。

【第2期】

○大谷木 緑四郎

昨秋、元気で米寿を迎えました。会の益々の発展と諸氏のご健勝を祈念いたします。

○香取 進一

高齢の為、足の具合が悪く出席できません。長い間有難うございました。

○富田 敏郎

総会、同窓会の案内並びに桜水会報送付有難うございました。体調により出席できません、ご盛會を念じます。

○宮本 正

賃貸住宅 8 戸と年金生活で皆様に話のできるところがありません。

【第3期】

○岡庭 邦夫

桜水会会報拝読致しました。役員の皆様ご苦勞様です。小生まだまだヘボゴルフ、ジム通い、地域のボランティア・・・夢を求めてやって居ります。会の更なる発展を祈願致します。総會当日他の会と重なり、残念です。楽しみにしていたのに・・・。

【第4期】

○國守 俊策

同期の秋山朋子さんの訃報に驚きました。水産科の女子学生のパイオニアです。1、2、3 期生は女子学生はいなかった。肺ガンだったとの事でした。同期の諸兄近況を会誌に投稿して下さい。もうあとのない年齢になりました。下馬、馬堀の思い出を語りたいです。

○日野 演彦

今回も出席出来ません。出席の皆さんによろしく。

○元島 和義

久米君、南氷洋捕鯨の本国会図書館に蔵書として献本されたこと心よりお祝い申し上げます。國守君健在であること祈ります。同期の皆さん大台まで生きようぜ。

【第6期】

○長瀬 親正

元気にやっております。アメフトのニュースに心をいためております。

【第7期】

○大西 慶一

今のところ元気です。小旅行等をして、晩年を過しています。今回は欠席させていただきます。総會、合同懇親會の盛會を祈ります。

○清水 明

会報で平木君の訃報を知りました。残念です。体調上出席ができません。桜水会の益々のご発展を祈念申し上げます。

【第 8 期】

○上野 智章

毎日、元気に生活しております。

○藤原 貞夫

申し訳ありませんが体力がなく、出席できません。一度最後に 8 期の人にお会いしてからあの世へ。

○村田 安彦

札幌は一年で今が最高の季節です。先日大通り公園を散歩すると、外国の観光客の多い事に驚かされました。今回も出席できませんが、総会の盛会を祈願致します。第 8 期生の皆様は元気で越して下さい。

○吉田 勉

桜水会、事務局の皆様毎度ありがとうございます。今年も出席できません。

【第 9 期】

○木全 光

父・木全光は、昨年 12 月 3 日に亡くなりました。お世話になりました。ありがとうございました。（ご家族より）

○高山 三郎

25 年 6 月に長野県上伊那郡で同期会を開催、45 名に案内しましたが、20 名が出

席、楽しく懐かしく終える事ができました・・・自分が健康なうちにもう一度計画したいと思っています。

【第 10 期】

○川端 肇

会報で旧友の動行も知り、感謝しています。長年携わった「さけますの増殖事業」北海道の資源も年々減少しています。海洋の環境はあるにしても技術が問題とっていますが、休肝日なし、元気デス。

【第 11 期】

○田中 夏積

年齢相応にヒザ、カタ、ヒジと痛みに悩まされていますが、一応元気です。皆様のご活躍とご盛会を祈ります。

○友行 一紀

ご盛会をご祈念申し上げます。ミニクラス会常連の森田翔三君が 2 月他界しました。年々少くなりますが、できるだけ続けます。勤務は有難いことに今も続行中です。でも老害にならない内にとっています。

○中田 忠則

体調不良のため動けません。

【第 13 期】

○須田 泰雄

私は「山の会」に入っており、春は新緑の山、秋は紅葉の山を歩いています。桜水会、海洋生物資源科学科の益々のご発展をお祈りします。

○田中 章

2016 年 4 月 15 日に亡くなりました。
長い間お世話になりました。(ご家族より)

○平田 家興

来年は 80 歳是非参加したいと思ってます。近況、近畿地区日大親睦ゴルフ会には毎年参加しております。

【第 14 期】

○篠崎 丈夫

桜水会事務局の皆様お世話様です。今回都合により欠席ですが、14 期クラス会に時折、出席して日大時代や現状の話で楽しくしています。

○丸山 勉

昨年 5 月で 53 年間の仕事人生を卒業致しました。生涯現役と思っていましたが家庭の事情で仕事に終止符を打ちました。元気にやっています。

【第 15 期】

○小川 起玄

ご案内をありがとうございました。実母見舞で帰省中ですので欠席とさせていただきます。

○宮 忠義

桜水会関係者の方々毎年御苦労様です。小生、生涯現役で毎日努力しています(生命があれば希望がある)。相変わらず夢とロマンを求め平凡ですが日帰りバスツアー等で楽しく過ごしています。成瀬先生、

吉原先輩のご冥福をお祈り致します。

【第 16 期】

○関根 敏彦

出席できず残念ですが、諸氏の益々の御活躍を祈念致しております。

○谷岡 勉

但馬魚市場会長職今だ継続中。東金の関谷やっと退院とのこと、ホッ。42 号での山本の話。小田原、田代カマボコ店懐かしいナ～。同期の諸君、くれぐれも健康に・・・・です。

○山本 武人

クロアチアに 3 週間ほど旅行してたので連絡が遅れてすみません。アメフト問題は驚きと残念です。この際、日大のウミを出し体制改善すべきでしょう。教職員皆様の奮起に期待します。

【第 17 期】

○平田 康彦

卒業後 50 年、73 歳になりアルバイトをしてがんばっています。成瀬先生、望月先生、大久保氏、脇坂氏の御冥福をお祈り致します。

【第 18 期】

○林 公義

平成 30 年 4 月より宮内庁侍従職御用掛として生物学研究所に席をおく事になり、週 2 日ですが、東京通いを始めました。71 歳になって職につくなど夢にも思ってい

ませんでした、元気にしております。

○橋ヶ迫 覚

入院治療の為欠席させていただきます。
宜しくお願いします。

【第 19 期】

○青砥 健一

いまだ仕事をしており、たぶん、日本に
いません。

○松井 正之

70 歳元気でやっています。まだまだ現
役です。同期の方特に日大号に乗船した方
連絡下さい。090-7549-0503。

【第 20 期】

○川村 淳

民生審査委員として 2 年目をむかえて
います。独居高齢者の問題をひしひしと感
じています。

○興津 正

現役続行中（筑地卸株）関富で営業、若
手教育係と兼ねて奮闘している。豊洲移転
どうなるか？欠陥だらけで問題山積状況
です。

○服部 和重

65 歳で会社を退職して、2 年前から作
陶活動を楽しみ、シーズンになれば同期の
友達と、一緒に片道 500 k m の道程を車を
飛ばしての、山形岩魚釣行を楽しんでおり
ます。まだまだ元気に遊びますよ。

○村上 泰義

5 月 22 日から 6 月 8 日までオーストラ
リア・ニュージーランド・タヒチと旅行し
てました。タヒチは 50 年前に実習船・日
大号で初めて入港以来、昨年に続き 5 度目
の旅行です。当時と今では首都パピエテは
すっかり変わりました。わずかに残る面影
に自分の青春時代を思い出しました。

【第 21 期】

○井元 雅敏

平成 27 年 5 月に他界しました。（ご家
族より）

○海老沼 四郎

現在各漁協において、経理部門の水産監
査士が不足している状況です。日大商学部
（村井教授）や経済学部（村田教授）にも
在校生で当該監査士の取得をお願いして
いますが、貴学部の在校生も取得されたら
と思います。就職活動に役立つと思います。

○広瀬 幸一

当日は、遠漁及び機関（日本大学号と共
に S40 年代から S50 年代、7 期で終了）
の 2 年毎のクラス会が北海道の乙部町（お
とべちょう）にて開催されますので残念な
がら当会は欠席となります。

○山本 忠

21 期の同窓会（適水会）が北海道の乙
部町で有るので出席してきます。北海道で
の同期会幹事は高井君です。携帯
090-3398-7224。

【第 22 期】

○伊集院 文孝

内海水先人として 9 年目に入ります。まだ現役です。

【第 23 期】

○伊藤 浄治

今年度こそ、嘱託職員を終了と思っていたましたが、別な職場で同様嘱託職を命じられ、新たな気持で 7 年となりました。体が動けるうちは、海外旅行を楽しみます。卒業航海で行ったフィジーにも行こうと計画しています。

○大杉 幸毅

船乗りをやめて 38 年血液循環療法を広めるため日夜奮闘していますが、日暮れて道遠し。若き日の夢だった帆船クルージングで息抜き・・・です。

○加藤 直弥

H30 年 7 月、44 年間日鉄鉱業（株）の子会社で石灰石他の営業及び配船・荷役手配業務を行って参りました。定年後に嘱託社員として 7 年間勤務し嘱託期間満了にて退職いたしました。第二の人生を有意義にと思慮しつつ過ごして活きたいと思ひます。

○鈴木 公一

日本大学を退職後、家でごろごろしております。

【第 24 期】

○小野 龍一

新曲「ふたりの春」「夕陽海岸」が 5 月キングレコードから全国販売になります。カラオケに入っているので皆さん、天翔龍の「ふたりの春」是非唄って下さい。7 月には関西放送演歌百選のテレビ出演も決定してます。

○田辺 明彦

夜間の時間帯の為行くことができません。御盛會を祈ります。

○長谷川 貢

病氣療養中の為

○堀内 昇

定年退職後、趣味のバイク（古い BMW）のコレクションを楽しんでいます。埼玉在住ですのでツーリングにも便利です。

【第 26 期】

○高橋 昇

平成 30 年で満 65 歳になります。孫も 3 人となり夫婦仲良くしております。

○椿 等

公立中学校を定年退職した後、現在は、松戸市の「21 世紀の森と広場」という自然尊重型の公園で非常勤職員として週 3 回勤務しています。

【第 27 期】

○橋本 和則

現在県の嘱託職員としてまだ働いています。

○松永 一男

出席を考えていましたので、返事がおそくなって申し訳ございません。大阪で校友会副支部長をしています。

【第 28 期】

○津崎 順

近所の里山公園内のビオトープ管理や子ども達に生き物のおもしろさを伝える自然観察会に汗しています。定年退職 2 年目も「アクアマリンふくしま」に距離を置きながら在職中。3 年目は・・・どうしているだろう。

○店網 秀男

定年前に教員生活を辞め、昨年秋より県の水質管理センターで、浄水の分析や細菌の検査を行っています。学生時代の経験が役に立っています。

【第 29 期】

○成瀬 晃

ウナギの町浜松に住んでいますが、価格の高騰で鰻重は、とても庶民の口には入らなくなりました。ウナギの完全養殖の商業化が完成するまで食文化を守るのが先か、絶滅危惧種の保護が先か考える時期に来ているような気がします。日大ウナギ学研究室の成功に期待しています。

○野田 友行

今年 2018 年 3 月末日をもちまして定年をむかえました。あわせてしながわ水族館館長も退任いたしました。ご指導いただきました皆様には大変感謝しております。ありがとうございました。

【第 30 期】

○荻野 真澄

双子が産まれて、孫が三人になりました。

○宮川 秀樹

受話器を取って「ハイ、宮川でございます」と言ったところ、「あっ、まちがいました」の答えが返ってきました。それは以前「オレ、ヒデキだけど」と「オレオレ電話」を掛けてきた奴の声でした。みなさん、ご用心ご用心。

【第 31 期】

○逸見 明久

工業高校での勤務 3 年目を迎えました。来年度 1 年間で退職となりますが、水産教育に未練はありながらも退職まで工業教育の発展のために貢献することに決心いたしました。退職後はこれまで貢献できなかった私の故郷であり、人生のスタートである日大 Cutter 部に貢献いたします。

○手原 昌宏

間もなく定年退職を向えます。第 2 の人生をどう生きて行くか模索中です。残りの人生、人様の役に立てれば一番良いと思います。つつ自分のできる事を考えるこの頃です。

【第 32 期】

○井上 博

卒業して 35 年経ちました。体重も 80kg と肥満ぎみで腰痛症です。愛車の glc43AMG で箱根へのドライブが息抜きです。

【第 33 期】

○橋谷 剛

うなぎ屋経営もおかげ様で 30 年目に入りました。うなぎプラネットの展示を目学させていただきました。久しぶりの母校、展示のすばらしさに感動しました。

【第 48 期】

○荒 祐子

娘は小学 6 年生、息子は小学 4 年生になりました。毎日、子供達にふりまわされています。

【第 53 期】

○磯邊 隆

小学校の PTA 会長は終わりましたが、今度は中学校の PTA 会長の話が来て、先日より着任し、再び忙しい日々を送っています。

【第 61 期】

○鈴木 晴香

本年 1 月に入籍し、真田春香となりました。お世話になりました。森司先生の今後益々のご健勝お祈り申し上げます。



会計報告

平成29年度日本大学桜水会の収支決算は以下の通りですので、ご報告致します。

会計担当 小糸 智子

平成29年度 日本大学桜水会決算報告書

1. 収入の部

項 目	予算額	決算額	摘要
準会員年会費	1,778,760	1,763,000	
繰越金	839,822	839,780	
会報発送補助	200,000	200,000	学部校友会より
雑収入	0	60,000	同窓会祝儀60,000円
利息	2,500	966	
その他	500,000	700,000	終身会費積立金一部取り崩し
合 計	3,321,082	3,563,746	

2. 支出の部

項目	予算額	決算額	摘要
通信連絡費	720,000	770,397	
会報・総会案内発送	690,000	739,287	
通信費	30,000	31,110	
事業費	2,120,000	1,620,680	
会報発行	260,000	277,560	
準会員対策費	400,000	324,770	運動会Tシャツ、基礎実習支援ほか
卒業記念品	180,000	102,600	タイピン、ブローチ
総会・同窓会費	500,000	446,824	
名簿管理費	150,000	146,804	業者委託
学科パンフレット作成補助費	200,000	0	
学会参加費補助（学生）	300,000	81,729	11件
講演料	80,000	100,000	6名分(概論、桜水会総会、交通費含む)
その他	50,000	140,393	学生表彰、卒論コンペ、振込手数料、祝儀代、ボールペンデザイン料
事務局費	280,000	241,281	
会議費	100,000	122,049	
会議時交通費補助	30,000	21,000	
消耗品費	30,000	9,232	
アルバイト費	100,000	74,000	
その他	20,000	15,000	
慶弔費	30,000	14,000	
予備費	171,082	0	
繰越金	0	917,388	
合計	3,321,082	3,563,746	

終身会費積立金

平成28年度まで	23,073,590	
平成29年度	-700,000	積立金一部取崩(-70万円)
合計	22,373,590	三井住友銀行、かながわ信用金庫

会員名簿発行積立金

平成28年度まで	1,233,276	
平成29年度収入	105	利息105円
合計	1,233,381	横浜銀行定期

事務局便り

○ “天気晴朗なれど波高し、皇国の興廃此の一戦に在り、各員一層奮励努力せよ” 正に日本大学を取り囲む状況を示す言葉だ。生物資源科学部の受験生数も減っている為、今年は試験会場も大幅に増加させて対応を図った。次は、この学部の生き残りをかけて学部改革も予定されている。日大のみならず、日本社会も気になることが多い。自分の身体も気になる所は、必ず問題がある。

しかし、今年もこの学び舎を 139 人が巣立っていく。先が見えない不安から立ち尽くすことも有るかもしれない、でも一歩、一歩、明日を信じて人生を歩んで貰いたい！

○平成 30 年度の卒業生（第 68 期）は 139 名となりました。卒業生各位のご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。これに加えて、正会員の総数は 9246 名となります。

○平成 30 年度 1 年次前期開講科目 海洋生物資源学概論の一環として、松本将史氏（45 期、株式会社能水商店）、金子直博氏（47 期、株式会社本田技術研究所）、平工顕太郎氏（55 期、長良川漁師 / ゆいのふね代表）、小野ゆかり氏（64 期、三洋テクノマリン株式会社）、増田真之介氏（64 期、新潟県立海洋高等学校）の講演会を実施しました。詳しくは【海洋生物資源学概論の講義内容紹介】をご覧ください。

○桜水会会員各位の住所、勤務先、電話番号などに変更がありましたら、個人情報保護の観点から、桜水会ホームページの「名簿修正依頼」上で直接修正していただくか、
<http://cgi.solution1.jp/osuikai/meibo.php>

（Yahoo で検索：日大桜水会 → 名簿修正依頼）もしくは郵送にてご連絡ください。なお、平成 22 年 4 月 1 日より、日本大学生物資源科学部の郵便番号が「252-0880」に変更となっております。ご注意ください。

○本年度の総会は、6 月 15 日（土）に本学部で開催予定です。会員各位におかれましては、ふるってご参加の程、お願い申し上げます。

（事務局長 森 司）

住所変更手続きについて

平成 22 年 3 月 1 日より、桜水会ホームページ上から名簿（住所・勤務先等）変更届けができるようになりました。

<http://hp.brs.nihon-u.ac.jp/~kaiyo/>

編集後記

○桜水会会報本号では、「職場便り」（4件）、「研究室便り」（9件）、「同期会便り」（3件）、および会員の「近況報告」を掲載しました。

○また、今号より海洋生物資源科学概論（1年次、必修）の講義内容を紹介させていただきます。桜水会会員の講師陣から、現役学生に送る熱きエールを感じていただければと思います。

○桜水会のホームページ（HP）を立ち上げ、学科 HP にリンクしております。桜水会の沿革・歴史、役員・事務局、各卒業期の会員数の他、桜水会会報 24 号（平成 11 年度）以降のバックナンバーを掲載しており、ダウンロードもできますので是非ご覧ください。学科ホームページのアドレス <http://hp.brs.nihon-u.ac.jp/~kaiyo/> です。



○同窓会を企画されている幹事の皆様へ
個人情報保護の観点から名簿の提供は困難な状況です。対応策としまして、総会案内送付時に、幹事の方が作成された同窓会開催案内を同封する形をとらせて頂いたこともありました。必要に応じて、下記にご相談ください。

E-mail:

fukushima.hideto@nihon-u.ac.jp

（編集担当 福島 英登）

原稿の募集

桜水会会報 44 号の原稿を募集します。
「職場便り」「近況」「クラス会」「随筆」など、800～1,000 字程度にまとめ、2019 年 12 月末までに下記にお送り下さい。なお、原稿は下記の電子メール（添付ファイルの場合、Word で作成のこと）でも受け付けています。

（送付先）〒252-0880

神奈川県藤沢市亀井野 1866

日本大学生物資源科学部

海洋生物資源科学科内

桜水会事務局 宛

E-mail:

fukushima.hideto@nihon-u.ac.jp

（福島）

日本大学桜水会会報 43 号

平成 31 年 3 月 発行

編集 日本大学桜水会事務局

発行 日本大学桜水会

日本大学生物資源科学部

海洋生物資源科学科内

〒252-0880

神奈川県藤沢市亀井野 1866

電話 0466 (84) 3680

E-mail: mori.tsukasa@nihon-u.ac.jp